2018 年 10 月 4 日：担当　岩村亮

第１３章　戒の波羅蜜　p205：6 行目～p207

p205：6 行目～p207：下から 3 行目

三門の不浄の諸行を捨てて三つの清浄に依る

さらにまた、他の菩薩を浄信し、自己が損なわれないために〔身語意の〕三門の不浄の諸行を捨てるし、三つの清浄に依るべきです。

清浄（しょうじょう：①清らかでけがれのないこと。また、そのさま。②煩悩や悪行がなく、心身の清らかなこと。

浄信（じょうしん）：①清らかな信心　②親鸞では、一片の疑心もない真実の信心のこと。阿弥陀仏の本願の救いのはたらきによって与えられた、回向の信心のこと。

（石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

そのうち、身の不浄の諸行は、必要性を欠如した跳ねる・駆けるなどの粗暴な行動、それらを捨てるのです。
清浄の諸行は、有暇と柔和に住する。顔は笑みをもつべきです。そのようにまた〔『入行論』に〕「そのように自由が有る者は、常に微笑みながら為しなさい。怒りの顰（ひそ）みを全く捨てて、〔世の〕衆生の友と誠実な者として為しなさい。」と説かれています。

有暇：（無暇の逆ですね。）→無暇：仏道修行の障碍になるもののこと。これに八つを数え、八無暇・八難処などという。（岩村注：ということは、「有暇」は仏教の修行をするための時間を得た恵まれた境涯のこと、ぐらいの意味でしょうか。ただ文脈的にいまひとつしっくりきませんね。）

住：①住むこと。また、その住まい。②執着すること。対象に心をとどめること。③四相（生・住・異・滅）の一つ。存在するものが現在の位においてその状態を保っていること。現在の状態に住していること。

柔和：性質や態度などの優しく穏やかなさま。

自由：①心のままに振舞って束縛のないこと。②一切の苦楽から解放されてさま。とらわれない悟りの境地。

（以上 3 点　石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

顰み：眉間（みけん）にしわを寄せ顔をしかめること。

（ネット検索・出典：デジタル大辞泉（小学館））

他者を見るとき、どのように見るかは、〔『入行論』に〕「眼により有情を見るときも、これら〔有情〕こそに依って私は仏になるであろうと、正直で慈しみの状態で見よう。」と説かれているようにです。
坐るとき、どのように坐るのかは、〔『入行論』に〕「脚を伸ばして坐らないし、手を合わせて揉まない。」と説かれているようにです。
食べ物を食べるとき、どのように食べるかもまた、すなわち〔『入行論』に〕「口を満たしたのと音をともなうのと口を開いて食べるべきではない。」と説かれているようにです。
行儀のとき、どのようにすべきかは、「座など慌てて音をともなうことにより離れない。門もまた強く開かない。常にひそやかな話を喜ぶべきです。」と説かれているようにです。
眠るとき、どのようにすべきかは、すなわち〔『入行論』に〕「主〔である仏世尊〕が涅槃し横たわられたように、〔頭を〕望む〔べき北の〕方向に〔向けて〕眠るべきです。」と説かれているようにです。

「手を合わせて揉まない」：何ででしょう。どなたかおわかりでしたら御教示ください。
行儀：①行為・動作の作法。坐臥（ざが）進退の礼儀・作法。別して仏事・行事の儀式・仕方。②手本とされる姿、形。また則（のり）となる行為をすること。
（石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

語の不浄の諸行は、多くを語ることと、鋭く語ることを捨てたのです。それもまた、多く語ることの過失は、『聖宝雲経』に説かれています。すなわち、

「幼児は正法から衰退する。心は柔和でなくきわめて粗暴になる。止住・勝観よりはるかに遠い。語るのを喜ぶことの過失はこれらです。常に諸師に対する尊敬が無い。汚猥の話に喜びを生ずる。心髄の無いものに住して、智恵が損なわれる。語るのを喜ぶことの過失はこれらです。」などと説かれています。

鋭く語ることの過失は、『月灯〔三昧〕経』に

「どんな錯乱が見えても、過ちだと宣べない。どのような業を為しても、そのような果を得ることになる。」と説かれています。

『一切法無生説示経』にもまた、

「菩薩について堕罪を話すなら、正覚に遠くなる。嫉妬により話すなら、正覚に遠くなる。」などと説かれています。

よって、多く〔語ること〕と鋭く語ることを捨てるべきです。

止住：心の想念をすべて静め、その状態にとどまること。
勝観：仏教語大辞典になし→「観」：対象を正しく理解すること。
真髄：①まんなかにある髄。②物事の中心となる大切な所。中枢。③心の中。心底。
（ネット検索・出典　三省堂大辞林）
知恵（はんにゃ）：般若（はんにゃ）　一切の事物・道理を明らかに捉える、悟りの智慧
正覚（しょうがく）：①正しい仏の悟り、②悟りを開いた人
（「真髄」以外　石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

語の諸行が清浄にどのように語るかというなら、すなわち〔『入行論』に〕、
「語るなら、合意の関係をすると、義が明瞭で好ましいのと、貪と瞋を捨てるのと、穏やかに適切に語るべきです。」

と説かれているようにです。

合意の関係をすると：辞書には「意」しか載っておらず、いまひとつ掴めません。
義：①意味。②意義。③真理。④仏の教説。教義。⑤本来の意義・目的。以下略
貪：①六根本煩悩の一つ。また三毒、十悪などの一つ。貪愛、貪欲ともいい五欲の対象に執着する迷い。以下略
瞋：①三毒の一つ。また十悪の一つ。自分の心と違うものに対して怒りにくむこと。以下略
（「合意」以外　石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

意（こころ）の不浄の諸行は、利得と恭敬にこだわることと、睡眠と惛沈（こんじん）に執着することなどです。
それもまた、利得と恭敬に執着することの過失は、『勧発増上意楽経』に、
「マイトレーヤよ、菩薩は
利得と恭敬は貪欲を生じさせることを観察すべきです。
利得と恭敬は瞋恚を生じさせることを知るべきです。
利得と恭敬は愚癡を生じさせることを知るべきです。
利得と恭敬は諂（てん）を生じさせることを知るべきです。
利得と恭敬は一切諸仏が認可されないことを観察すべきです。
利得と恭敬は善根を奪うことを観察すべきです。
利得と恭敬は相手を騙す売女と似ていることを観察すべきです。
」などと説かれています。

利得（りとく）：利益：もうけ、得のこと。（ネット検索　ウィキペディアより）
恭敬（くぎょう）：つつしみうやまうこと。きょうけい。（出典：小学館デジタル大辞泉）
惛瞋（こんじん）：心がめいって、ふさぎこむこと。沈みこんで、働きも鈍感になり、怠惰・頑迷にさせる精神作用。（「石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）
愚癡（ぐち）：愚かなこと。原語は一般にサンスクリット語のモーハ moha があてられ、莫迦（ばか）（のちに馬鹿）の語源とされている。仏教用語では、真理に暗く、無知なこと。道理に暗くて適確な判断を下せず、迷い悩む心の働きをいう。根本煩悩である貪欲（とんよく）（むさぼり）と瞋恚（しんに）（怒り）に愚痴を加えた三つを三毒（さんどく）といって、人々の心を悩ます根源と考えた。また、心愚かにも、言ってもしかたのないことを言い立てることを、俗に「愚痴をこぼす」などと用いるようになった。（出典　小学館　日本大百科全書（ニッポニカ））
諂（てん）：へつらうこと。おもねること。本心をかくして従順をよそおうこと。
（「石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

利得は得ても、満足することになりません。『父子相見経』に「〔例えば〕夢に見た水のように、飲んでも満足しないでしょう。」と説かれています。そのように観察して、少欲であり、知足すべきです。
睡眠に喜ぶことの過失もまた、すなわち、〔『勧発増上意楽経』に〕
「睡眠と惛沈に喜ぶ者――
彼は、智恵（はんにゃ）がきわめて弱く小さくなる。
彼は知も全く損なわれることになる。
智慧から常に彼は衰退するでしょう。
」といい、「睡眠と惛沈に喜ぶ者は，
無知、懈怠、怠けから智恵が混乱する。
彼には人でない者（非人）が隙を得る。
森に住するときに加害されるでしょう。
」などと説かれています。

よって、それらを捨てるべきです。
意（こころ）の清浄の諸行は、浄心など前に説いたそれらに住すべきです。

知恵（はんにゃ）：般若（はんにゃ）　一切の事物・道理を明らかに捉える、悟りの智慧
知：①知ること。物事の道理を理解し、是非善悪を判断する能力。②悟りの本源的な智慧
智慧（ちえ）：対象を正しく捉えて、真実を見極める能力
浄信（じょうしん）：①清らかな信心　②親鸞では、一片の疑心もない真実の信心のこと。阿

弥陀仏の本願の救いのはたらきによって与えられた、回向の信心のこと。

（4 件すべて　石田瑞麿『例文　仏教語大辞典』より）

p206：下から 2 行目～p207：1 行目

戒を増長させるもの

戒を増長させるのは、智慧と智恵（はんにゃ）と廻向との三つにより増長させるのです。上に〔「施しを増長させるもの」の箇所に〕説いたようにです。

施しを増長させる方便

施しを増長させることは、それら三つの施しは少しであっても、多くに変える方便があるのです。『菩薩蔵経』にもまた「シャーリプトラよ、賢者の菩薩は、少しの施しをもまた多くするのです。

１）智慧の力により殊勝にするのです。

２）智恵の力により広大にするのです。

３）廻向の力により無量にするのです。

」と説かれています。

そのうち、

〔第一：〕「智慧の力により殊勝にする」ということは、三輪が全く清浄だと知るのです。施す者も幻術のようなもの、施し物も幻術のようなもの、施す対境も幻術のようなものです。

〔第二：〕施しの多くの福徳が生ずるために、「智恵の力により広大にする」ということは、どんな施しを与えても、最初に一切有情を仏陀の地に立たせるために与える。中間に施し物についてこだわりがない。最後に施しの異熟（果報）について〔見返りの〕願いを離れているのなら、施しの福徳を広大に得るのです。『聖摂』にもまた「施しを与えてから、事物〔の有〕に住することが無い。彼はいつも異熟〔・果報〕を願うことがない。そのように施す賢者はすべてを施す。少しを施したのに多く無量になる。」と説かれています。

〔第三：〕「廻向の力により無量にする」ということは、それら施しは一切有情のために正覚に廻向したなら、無量になるという意味です。よって、『菩薩地』〔の「施品」〕に「果を顧みて施しを与えることもしない。施しすべて〔の善〕を無上の正等覚に廻向する。」と説かれています。

廻向することにより、ひたすら増長するだけでなく、無尽にもなるのです。『聖無尽意経』に「尊者シャーリプトラよ、例えば、一滴の水が大きな海に落ちたのは、劫の終極まで失われず、尽きることが無いのです。同じく正覚に廻向された善根は、菩提の心髄にあるまで失われず、いささかも尽きることになりません。」と説かれています。

戒を清浄にするもの

戒を清浄にするものは、空性と悲により支えられたことです。上に〔「施しを清浄にするもの」の箇所に〕説いたようにです。

施しを清浄にするもの

施しを清浄にするのは、『集学論』（訳註４４）に「空性と悲を胎とした行により、福徳は清浄になる。」と説かれています。それら施しが空〔を悟る智恵〕により支えられたものは、輪廻の因にならないし、 悲により支えられたものは、小乗の因にならないのです。無住涅槃のみの因になるから、清浄です。

そのうち、

空〔を悟る智恵〕により支えられたものは、『宝髻所問経』には、施しに空性の四つの印により捺印することを説かれています。すなわち、「それは四つの印（V172）により捺印してから、施すのです。四つは何かというと、

1）内の身体を空性の印により捺印することと、
2）外の受用〔される資財〕を空性により捺印することと、
3）心を対境とした空性の印により＊捺印することと、
4）法〔である〕正覚を空性の印により捺印すること

―〔すなわち〕それら四つの印（H77b）の捺印をしてから、施すのです。」と説かれています。悲により支えられたものは、有情たちの一般〔の苦〕または差別の苦に耐えられずに、施すのです。

戒の果

戒の果は、

1）究竟（くきょう）と

2）当座の二つと知るべきです。

そのうち、

〔第一：〕究竟は無上の正覚を得るのです。そのようにまた『菩薩地』に「菩薩は戒の波羅蜜を完成してから、無上の正等覚に現等覚するでしょう。」と説かれています。

〔第二：〕当座には、欲しがらなくても、輪廻の幸福な円満を得るのです。そのようにまた、『菩薩蔵経』に「シャーリプトラよ、そのように戒が全く清浄な菩薩は、天と人の円満な吉祥の経験しないであろうものは、何も無いのです。」と説かれています。

究竟（くきょう）：①最上であること。究極であること。また、そのもの。②到達した究極の境地。その最高の段階。③極めること。最後の境地に達すること。

当座：①居合わせている座。その場。その席上。②その場ですぐ。即座。③その場かぎり。

無上：①この上もないこと。最も勝れていること。

正等覚（しょうとうがく）：≪あのくたらさんみゃくさんぼだい。梵ANUTTARA-SAMYAKSAMBODHI の訳≫仏の悟りのことで、この上なく正しく（正）、平等円満（等）の智慧の悟り（覚）の意。

現：①いまこの世にあること。現にあること。②現世の略。③現れること。

等覚（とうがく）：①≪真理を悟った仏の悟りの内容はどの仏も等しいという意で≫仏をいう。→等正覚。②修業が満ちて、智慧・功徳が仏と等しくなった最高の位。

菩薩の最高位。またその菩薩。天台宗では十地を超えた位、法相宗では十地の最高法雲地に収める。③真宗で、他力の信心を得た正定聚不退の弥勒と等しい位をいう。

（石田瑞麿『例文仏教語大辞典』より）

輪廻の幸福はそれによってもまた圧倒されなくて、菩提の道に入るでしょう。
『那羅延所問経』に「

そのような戒蘊（かいうん）を具えたその菩薩は、天輪王の帝政から衰退しない。彼はまた不放逸であり、正覚を欲するのです。

帝釈天から衰退しない。彼はまた不放逸であり、正覚を欲するのです。

」などと説かれています。

また、戒を具えた彼は、人と人でない者（非人）たちにより供養されるし、奉事されることになるのです。すなわち、『同経』に、「

戒蘊に住する菩薩に対して、

諸々の天は常に礼拝するのです。

諸々の龍は常に賞賛するのです。

諸々のヤクシャ（夜叉）は常に賛美するのです。

諸々のガンダルヴァは常に供養するのです。

諸々のバラモンとクシャトリヤと商主と長者は常に祈願するのです。

諸々の仏陀は常に思念なさるのです。

天をともなった世間は常に灌頂するのです。

」などと説かれています。

〔以上が、〕『正法如意宝珠・解脱の宝の荘厳』より、「戒の波羅蜜」の第十三章です。

戒蘊（かいうん）：①正しい仏の悟り、②悟りを開いた人

天輪王（てんりんおう）：天輪聖王に同じ→天輪聖王（てんりんじょうおう）：四天下を統一して正法をもって世を治める王。

あいたた！

不放逸：修行などをなまけないこと。勝手気ままな心に流されないこと。

正覚（しょうがく）：①正しい仏の悟り、②悟りを開いた人

龍：巨大な蛇の類。天竜八部衆の一つ。仏教守護の神とされる。

ヤクシャ：→夜叉：容姿や姿が醜怪で猛悪な鬼神。仏教にとり入られて八部衆の一つとされ、毘沙門天の眷属で諸天の守護神として北方を護る。

（ここまで　石田瑞麿『例文仏教語大辞典』より）

ガンダルヴァ：（梵：गन्धर्व[gandharva]）は、インド神話においてインドラ（帝釈天）に仕える半神半獣の奏楽神団で、大勢の神の居る宮殿の中で美しい音楽を奏でる事に責任を負っている。 また、ソーマの守護神であるとも伝えられている。 アプサラスの夫だが、女性のガンダルヴァも存在する。（ウィキペディア「ガンダルヴァ」より）

バラモンとクシャトリヤ：カースト(英語: Caste[注釈 1]) とは、ヒンドゥー教における

身分制度（ヴァルナとジャーティ）を指すポルトガル語・英語である[1]。インドでは、現在も「カースト」でなく『ヴァルナとジャーティ』と呼ぶ[2]。紀元前 13 世紀頃に、バラモン教の枠組みがつくられ、その後、バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャ・シュードラの 4 つの身分に大きく分けられるヴァルナとし定着した。→バラモン：神聖な職に就けたり、儀式を行える。ブラフマンと同様の力を持つと言われる。「司祭」とも翻訳される。→クシャトリヤ：王や貴族など武力や政治力を持つ。「王族」「戦士」とも翻訳される。（ウィキペディア「カースト」より）

＊天輪聖王（てんりんじょうおう）で検索したら」、こんな画像が出ました（合ってる？）。

口先アドラーならぬ、口先仏教徒と化している私としては、正しい動機でちゃんと修行（「不放逸」であれ）しなさいね、と菩薩様はあまりのお慈悲によりこの部分を私が担当するようおはからいくださったようです。正直、わかってるけどできないんだよね～、って甘えてました。発表の準備は正直面倒でしたが、濃厚で本当にありがたい時間でした。ドルジンリンポチェのご法話を聞き直し、真剣に文書起こしを読み返したり。一切衆生のために、これから一生懸命修行しないと…ね。

暇満の舟なる人身得たからは
自他を輪廻の海より救うため
昼間も夜も心を散らさずに
聞思修する仏子菩薩行（１）

以上